

## 平成28年度 第1回桑名市総合教育会議 議事録

1. 日 時 平成28年8月9日(火)  
開会 10時00分 閉会 11時57分

2. 開催場所 桑名市役所3階第2会議室

3. 出席構成員

桑名市長 伊藤 徳宇  
桑名市教育委員会  
教育長 近藤 久郎  
委員 米田 真理  
委員 伊藤 茂一  
委員 松岡 守  
委員 稲垣 陽子  
委員 佐藤 強

4. 構成員以外の出席者

(総務部)

総務部長	水谷 正雄
総務部次長	駒田 保
総務課長	日佐 龍雄
総務課課長補佐兼総務係長	満仲 弘

(教育委員会事務局)

教育部長	石川 昭人
教育総務課長	山下 範昭
指導課長	野呂 はるみ
学校教育課長	高木 達成
人権教育課長	水谷 昌之
教育環境整備室長	山下 謙一郎
教育総務課管理係長	郡 厚

5. 議 題 (1) 子どもたちの現状  
(2) これからの時代を担う子どもたちに求められる「学力」について  
(3) その他

**【総務部長】**

皆様おはようございます。総務部長の水谷でございます。よろしくお願いいたします。

会議に入ります前に、本日の会議の公開についてお諮りをいたします。

本日の会議では、非公開とすべき案件の予定はございません。傍聴希望者がいらっしゃいますので、傍聴人の入室をご了解いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、入室をしていただきます。

(傍聴人の入室)

**【総務部長】**

ただいまから「平成28年度第1回桑名市総合教育会議」を開催いたします。

昨年度は3回の会議を開催し、ご議論をいただきながら、今年度から平成31年度までの4年間の教育施策の基本方針であります「桑名市教育大綱」を策定いたしました。今年度は、この教育大綱の3つの視点、7つの基本方針の実現に向けた教育振興計画策定の道しるべとなるご協議をお願いいたします。

本日の会議では、「子どもたちの現状」並びに「学力」についてご協議いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

ここからは、市長に会議の進行をお願いしたいと思います。

それでは、市長さん、よろしくお願いいたします。

**【市長】**

改めまして、皆さん、おはようございます。

大変お忙しい中、第1回の総合教育会議にご参加いただきましてありがとうございます。

早速会議のほうに入ろうというふうに思いますけれども、まずは事項の1、子どもたちの現状ということで、こちらを議題といたしたいというふうに思います。

事務局から説明をお願いいたします。

**【指導課長】**

失礼いたします。

昨年度は体力についてご協議いただいたと聞いておりますので、今回は、これからの時代を生きる子どもたちに求める学力ということで、指導課のほうの教育研究所がまとめました昨年度の全国学力・学習状況調査よりという資料を、もう既にホームページにアップされているものなんですけれども、これをもとに作成したプレゼンでございますので、スクリーンのほうをご覧いただきたいと思います。

最初に、昨年度の全国学力・学習状況調査の結果の概要とその分析についてご説明させていただきます。

学力テストというのは、昨年度、全員調査として国語と算数、数学のほかに、3年に1度の理科も実施されておりました。学力テストには、国語と算数、数学にA問題とB問題がありますので、最初に実際の問題を紹介させていただきますので、その違いを確認してみてください。

1つ目は、この問題です。こちらのほうは、次の図形の面積を求める式と答えを書きましょうというものです。ご覧いただいたらわかるように、平行四辺形の面積を求める問題ですので、ここにおみえの皆さんはさっと公式が浮かぶと思います。底辺掛ける高さという公式を用いて面積を計算していくと、24平方センチという答えが導き出されるわけです。

次の問題をご覧ください。こちらは、ひろしさんの家の近くに東公園があります、東公園です。

東公園の面積と中央公園の面積では、どちらのほうが高いですかという問題です。これは先ほどと違いまして、まず、東公園は長方形であるという、図形が平行四辺形ではないということ、それから、中央公園は平行四辺形であるという図形をまず見極めてから、公式をそれぞれ当てはめて面積を計算し、その面積の違いを求めて広さを答えるということになります。計算をさっとしていただきますと、東公園は100メートル掛ける110メートルで計算できます。それから、中央公園のほうは70メートル掛ける150メートルというふうに計算をしていただきますと、そうすると、東公園が1万1,000平方メートルで中央公園が1万500平方メートルですから、東公園のほうが高いというふうに答えを導き出していくということで、今の2問は、これは平成19年度の学調が始まったころの問題なんですが、最初のほうに出させていただいたものがA問題、これは知識習得の理解度、習得度を確認する知識型の問題になります。それに対して、B問題というのは、持っている既得の知識を活用して思考するというところで、活用型問題というふうに分けることができるかと思います。

この年の結果はと言いますと、A問題の全国正答率というのは96%でした。相当数の子ができていました。桑名市では、このときは97.7%という正答率が出ていますので、さらによくできていたわけです。B問題のほうは、全国正答率が18.2%で、桑名市の正答率が15.1%だった。やや全国に比べると、A問題は解けてもB問題は解けないなという傾向が、桑名にはこの年にはありました。これを見ていきますと、桑名の子どもたちはB問題のような問題になると無回答、答えないという子どもたちの率が高くなりまして、初めから諦めてやらない子どもたちもいたというふうに聞いております。特に国語のB問題というのは記述が多かったんですが、記述する問題には空白のまま出すというような子も多くいまして、無回答率というのが大きな課題になっており、桑名市として取り組んできた次第です。

次に昨年度の学力テストにはどんな傾向があったのかということをご説明させていただきます。

昨年度のテストのほうでは、おおむね正答はできていた問題について、小学校のものをちょっと例に出させていただきます。国語では、漢字を読むとか文章の書き方の工夫を選ぶ、算数は、四則計算をする、式に示された数量関係を示す図を理解する、平行四辺形の特徴を選ぶ、理科で、メダカの雌雄を見分ける、温度のグラフから打ち水の効果を理解する、塩化ナトリウムの化学式を書くというあたりはよくできていました。

また、それら結果のほうを、小中、全国、三重県と、上が全国、桑名市、三重県というふうに正答率が出してありますけれども、比較をさせていただきますと、見ていただくとわかりますように、小学校、中学校、いずれも全国と比べてほぼ同じである、中学校の数学については全国と比べて高いというふうな結果が出ました。

さらに、先ほど申し上げた無回答率ですけれども、無回答率は、じゃ、どうであったかということで、国語のB問題の無回答の推移のほうをこの3年間にわたってグラフ化してみますと、このようになります。以前は全国より桑名のほうの無回答率は高かったんですが、それがだんだんと改善されてきてまして、平成27年度は、中学校では全国とほぼ同じ数字になっています。小学校のほうでは全国よりも0.8ポイント低いということで改善が見られて、学習に向かう力、それから学習意欲の高まりというのが見られたのではないかと考えております。

次に、逆に正答率が低かった問題、そちらのほうから桑名の子どもたちの弱みを見ていきます。

まず、これは小学校の国語の問題です。これは正答率16.6%の問題でした。子ども読書の日について述べられたコラムの中から、筆者が引用している部分、言葉を書き抜くという問題だったんですけれども、これは三重県全体の中でもこの問題については正答率が低くて、課題が多かったとい

うふうに言われております。桑名でももちろん16.6%ですから課題が見られたんですけども、なぜ正答率が低かったのかということ进行分析していきまると、多くの子どもたちが引用という言葉で正しく理解できていなかったのではないかとこのふうなことがわかってまいりました。引用するところについては、前回、この前の調査でも弱いなということは全国的にも言われているところでもあります。

次に、小学校の算数の問題です。算数のBの問題なんですけど、これは正答率が14.2%です。洗剤の量を見ていただきますと、増量している洗剤480ミリリットルというのがあります、20%増量されています。では、増量前の量を計算して求めましょうというような問いなんです。この文章を見ながら、ここから問題文にいろんな情報が入っていますが、そこから比較する量と20%という割合、それをういて基準となるもとの量を計算するというのが出題意図なんですけれども、計算していただくと答えは400ミリリットルと出るんですけど、こちらのほうはやや、14.2%ということで弱いなというところで課題が見られた問題です。

次に、中学校のほうですが、中学校でちょっと資料のほう細かいんですけども、中学校の国語のBで出された問題ですけども、幾つかの資料が出ておりました。少し著作権の関係で欠けていますが、ウェブページの記事と、それから日本人の人口推移を示したグラフ、それから雑誌のグラフというのが3つ並べてあります、そこを資料をもとにしてもらって、そこから自分の考えを制限された文字数で、80字以上120字以内で書くという条件をつけて考えを述べるというものについては、正答率22.7%です。小学校のほうと比べると極端に低いというわけではないんですけども、やはりこういう問題、複数の資料から自分の考えの根拠を導き出して制限字数で書くというあたりに桑名の子どもたちの弱さが見られたかと思えます。

数学についてですが、お手元の資料のほう、ちょっと細かな文字になってはおりますけれども、プロジェクターでこのように画像を映し出すと、その作業をするときに、映像の明るさを2倍にするには画面の大きさをどのようにしたらいいかというのを、選択肢から選んでその理由を説明するというものです。これの正答率が10.6%ということでかなり低かったんですけども、資料の問題文の中から、この中から明るさと面積の間にある反比例という数量関係を理解して、それをもとにして答えを選び、言葉を数学的な表現で説明していくというこの問題は、全国的にもそうなんですけど、かなり弱さが見られると。知識はあるんだけど、さらにそれを活用して具体的な生活や、実験等に合わせて説明するあたりはかなり弱さが子どもたちにあると思えます。

教科別に今の小学校、それから中学校の弱みをまとめていきますと、国語では、小学校では目的、意図に応じて内容を整理して書けない、算数では、数学的な考えを用いて説明できない、理科では、観察や実験の操作を理由まで理解できていないというあたりが課題として見えてきました。

また、中学校のほうでは、自分の考えを根拠を明らかにして書く、もとにして書く、数学では、理由を数学的な表現を用いて説明する、理科では、実験を自然現象の仕組みと関連させて捉えるというあたりが弱かったなということがわかってきております。

参考としてですけども、全国学力テストの最近の問題にはいろいろな題材や資料から出題されておまして、これから子どもたちに必要とされる力を問うているなと思うのもありますので、ここでご紹介をさせていただきます。

まず、ちょっと古い問題ですけども、平成24年度の中学校の数学のB問題です。今ちょうどオリンピックが開かれておりますが、このとき出されたのは、長野のオリンピックでの原田選手、船木選手の記録、ヒストグラムが出ておまして、この記録を見ながら、次の選手起用するにはど

ちらの選手を起用するかというあたりを、正答というのではないんですが、どちらを選んだかということで、その選んだ理由をこの資料から適切に傾向を読み取って説明をして表現するという問題、こんな問題もありました。

それから、これは新しい問題ですけれども、平成26年度の小学校の算数Bです。箸の長さを問うた問題です。ただ、この箸の問題については、普段あまり聞かれない単位、子どもたちが普段使わないような単位のあらわし方、「一あた」というのが出ましたので、これでかなり子どもたちが惑わされたのではないかとということもあります。ちなみに「一あた」というのは、私、自分の指を出していますけれども、こういうふうに広げていただいてこうなると。このサイズが箸としては使いやすいよということで、こうやって持ってみれば非常に使いやすいサイズだなということが今わかるんですけれども、昔の単位だと思いますが、これをあえて小学校の算数、あるいは中学校なんかでも出題に用いて、題材として用いてきて答えさせる、単位で普段聞き慣れないものを使って考えさせるという、日本の伝統文化をもとにした出題も増えてきております。

これは中学校の国語のBです。国語のBでは、目黒のさんまという落語を題材にした出題もございました。これはちょっと飛ばさせていただきます。

これは昨年度の小学校の問題なんですが、これは一休さんのとんち話を取り上げておまして、屏風についての話、説明が続くんですけれども、とんち話は最後に殿様が、「もうよい、わしの負けじゃ」というふうに言うんですが、その最後の言葉をどのようにあなたなら読みますか、表現しますかというあたりを説明するというので、条件は、声に出して読むときに工夫すること、殿様の気持ちについて想像したことを40字以上80字以内で書くことという条件がついていました。この問題については、正答率は全国が66.6%で、桑名は65%でした。ややちょっと弱かったのかなというふうに思われます。

また、算数のBのほうではこのような問題もありまして、これは日常の買い物の場面を取り上げた出題でした。どんな買い方をするとトマト7個の値段が一番安くなるかを問うた問題です。地味な問題なんですけれども、こういう実生活に根差した問題がよく出されまして、こういう問題を取り組んでいくことが活用力につながるというふうな意図があるのではないかとというふうに思っております。

また、こちらは中学校のほうのA問題です。これは漫画で出題されたということで、初めての取組だったんですけれども、漫画の内容を参考にして、登場人物の思いや物の見方を想像することができるかという問題でした。設問の中に、この物語、竹取物語ですと答える問題があったんですが、桑名の正答率が70.6%でした。全国正答率は66.7%ということでしたので、非常に漫画に関しては桑名の子は強いのかもかもしれないなということ逆を思いまして。

それから、今年度は、じゃ、どんな問題が出たかということ少し参考までに紹介させていただきます。

今年度の中学校の国語のBでは、これは博物館のチラシを題材に取り上げています。博物館のチラシを題材にして、そこに書いてある開催期間、5月21日から6月19日まで、また、5月21日から24日の中で、職人の技を見てみようというコーナーについては日曜日開催だということで、そうすると、このイベントに行けるのは何月何日かということを考えて選ぶというような設問でした。このような一見ちょっと国語のBなんだろうかと思うところもあるんですけれども、身近な子どもたちが見に来るポスターやパンフレットなども題材にした出題がされるようになってきております。

それから、中学校の数学のBの問題では、これは友達が数学の問題をつくっていると、そのつくった問題について何か不足する部分があるので、それを読み取って、それに自分で問題の足りないところを見つけてつけ加えていきましょうという、そういう出題でした。こういうかなりこれは難しい問題でして、まだちょっと結果は出てきておりませんが、なかなか回答は難しかったというふうに思っております。

ここまでが学力に関する部分での報告なんですけれども、ここからはもう一つ、学調の中には児童生徒質問紙という部分がございますので、そこから子どもたちの学習状況や生活状況を分析したものをお知らせしていきたいと思っております。

最初に、学校に行くのが楽しいと答えた子どもたちの割合です。3年間をグラフにしております。小学校のほうでは、3年間とも86%以上、特に27年度は88%、9割近くの子どもたちが学校に行くのが楽しいというふうに答え、全国よりも上回ってきたということでもいい傾向ではないかと思っております。

中学校のほうは、特に楽しいという子どもたちの割合がやはり9割以上おまして、全国に比べますとポイントとしても非常に高いのではないかと。3年間ずっと高い状態で来ておりますので、桑名の子どもたちは、学校を非常に楽しみにして来てもらっている、肯定的な回答が高いなということがよくわかります。ただ、全ての子どもたちではございませんので、この数値に満足せず、学校が楽しいと思えるよう子どもたちへの配慮を学校としては大事にしていく必要があるかと思っております。

また、質問紙の中にこのようなものもあります。人の役に立つ人間になりたいと思いませんかというものに対して、肯定的な答えをしている子どもたち、小学校、中学校、合わせて常に90%を超えているということ、それから、人の気持ちがわかる人間になりたいと思うというものについても90%を超え、95%近くの子どもたちが昨年度はそのように答えているということで、やっぱり人のかかわりを大事にしていくということはとても必要ですので、子どもたちの思いを引き続き大切にできるような取組が必要かと思っております。

それから、いじめはだめですということで、いじめはどんなことがあってもいけないと思うということを問うております。小学校、中学校どちらも、平成27年度まで3年間ありますけれども、特に中学校なんかはだんだんとその数値が上がってきておまして、いじめは許さないという気持ちが大変強くなってきているんじゃないかと。自分を大切にする、仲間を大切にするようにこれからも維持していきたいと考えております。

また、桑名市の子どもたちは、自分にはよいところがあるという子どもたちが全国よりも毎年高いです。自己肯定感や自己有用感が高い傾向にはあります。その意味で非常にいい傾向はあるんですけれども、家庭での学習や生活面を問うた項目になりますとちょっと気になることがございます。それが次のものになります。

平日1日当たりの携帯電話やスマートフォンで3時間以上通話やメール、インターネットをしている中学3年生の割合です。平成26年、27年とも全国よりも高い傾向にありまして、これはかなり危惧される状況ではないかなというふうに捉えております。

また、所持率について小学校6年生と中学校3年生で問うておりますが、年々やはり所持率は高くなってしまっていて、中3では80%以上、6年生では50%以上の子どもたちが携帯電話、スマートフォンを持っているというふうな結果が出ております。

また、平日の過ごし方につきましても、2時間以上テレビやDVDなどを見ているという子ども

たちの割合が、小学校、中学校とも全国よりやや高い傾向です。また、2時間以上テレビゲームをしているという子どもたちも全国並みにおりますので、スマホも使っていてテレビも見てゲームもしているという平日の過ごし方も大変気になるところです。

では、平日に1時間以上家庭学習をしているというあたりなんですけど、じゃ、勉強しているのかという問いにつきましては、小学校、中学校とも1時間以上勉強しているというのは、全国よりも、中学校は全国並みですが、小学校はやや低いです。ちょっと低い傾向、これはかなり指導課としては気にしております。

また、休日はどうかとなりますと、休日はさらにやらない率が高くなっておりまして、小学校、中学校いずれも全国よりも低いというふうな、かなり小学校は低いというあたりが出ております。

また、読書の時間についても、平日1日当たりどれくらいの時間読書をしていますかという質問に対して、これは中学校を例にとっていますけど、全国では全く本を読まないというのが35%なのに対して、桑名市は43.7%が全く本を読みませんというふうな回答が出ておりました。学校のほうでは、ほとんどの学校が質問紙のほうで朝読書をしているとか読書の時間をとっているというあたりで、ほとんどが取組をしているんだけど、子どもたちがその時間以外に進んで読んでいるかというあたりがやや桑名の子は弱いのかなと、ずれを感じます。

同様に、授業づくりのあたりでも同じでして、授業のほうを学調の結果をもとにして教育委員会のほうからお願いしているのは、目当てをまず示してわかりやすい授業を行ってください、授業の振り返りをして、子どもたちの理解度をその都度検証してくださいという話をしておるんですけども、先生方の回答は、小学校、中学校とも、中学校は8割以上、教員としては小学校は9割以上の方々が目当てを示しています、振り返りも77%の方々が行っていますというふうに、先生方はやっておられるんですけど、子どもたちのほうの回答を見ると、やや、いや、かなりずれがありまして、子どもたちにとってはちょっと印象が薄いのかなというあたりは授業改善の大きな課題になっているのかなというふうに捉えております。

それと、最後に出させていただきましたのは、指導課が生徒指導上の課題から見える家庭の実態ということで、これは学調の結果とは別になるんですけども、気になる家庭の実態ということで挙げさせていただきます。

家庭教育の基盤である家庭の状況が以前とは大きく変容してきているというふうに感じております。気になる実態としては3つ、一応まとめさせていただきました。経済的な理由や親自身の養育能力など、親の抱えるさまざまな事情で養育状態が心配な家庭が出てきている。2つ目、発達障害など、子ども自身の発達課題のために育てにくさを感じて、養育の難しさを感じて悩んで対応に困っている親がいる。3点目、ネグレクトや虐待、収入があっても集金を滞納するなど、子育てよりも自分の生活を優先する親の意識がある。こういうことに左右されている子どもたちや個別対応に追われている学校の教職員の实態があるというふうに私どものほうでは把握をしております。

以上が昨年度の全国学力・学習状況調査の結果と、生徒指導上の発生事案から分析される桑名の小中学校の現状ということでご報告をさせていただきます。以上でございます。よろしくお願いたします。

#### 【市長】

ありがとうございます。

事務局から学力・学習状況調査についての説明があったわけでありまして、大変幅広く、いろいろ項目も多岐にわたっているわけでありましてけれども、こちらについて、委員の皆様からいろいろ

ろご意見を賜ればというふうに思っております。

まず、教育長から順に。

#### 【教育長】

今、指導課長のほうから学調を中心に、実態をお知らせしたということでございますが、これは、私ども、大変危惧しているところもございまして、子どもたちが教えられるということについては、嫌々ながらやっているという状況ですけれども、自分から進んでというところについては、いま一つ課題があるんじゃないかと。特に、桑名だけではないんですけれども、桑名の子もその部分が非常につらいと。

もう一つ、家庭学習につきましては、県のほうも、これからの学力向上については、家庭学習が1つのキーポイントになるというような話をいただいておりますが、桑名の今の実態を見ていただくと、平日も土曜日もありしていないというような状況でして、これはどうかと思うんですけれども、子どもたちの側からいくと、僕らは、私たちは塾へ行っているよと。だから、今のは塾の時間は入っていないので、塾のほうで勉強しているからもういいんだと。保護者の方も、塾へ行かせておるからというようなところがあるんじゃないかなと。かなり通塾率は桑名は高いということが1つ思われます。

それから、もう一つは、やはり二極化しているなというところが最近強く感じるところでございます。貧困の連鎖とか、あるいは経済的なものというのが大きなところもあるかもしれません。その中で、就学援助等も考えてはおるんですけれども、かなり個々の学校を見ていくと、格差が広がっているのを感じているところでございます。

それから、これはSNSとの関係かどうかはわかりませんが、読書の、全く読まないというのがあれだけ多いということになると、少し手は打っていかなくてはいけないんじゃないかなというふうに思っております。

それと、いじめの問題についても、多岐にわたって申しわけないですけれども、かなりいけないということはわかっているというふうに思っているようですが、それで、じゃ、自分が行動できているかとなるとどうかなというところは危惧するところでございます。

ただ、ここ2年、3年の経過を見ますと、かなり市全体で、あるいは学校で取り組んでいただいて、成果はあらわれつつあるなど。特に、中学校と小学校の高学年でそういう傾向が出てきているので、今後ますますやっていかなくてはいけないんじゃないかなと思いますのと、もう一つ、最後にジュニア・サミットの関連からですけれども、ジュニア・サミットに参加いただいた上堀内陸王さんの、ちょっと私も気になるので、いろいろ記事を見させていただいておると、その中に、彼が感想で述べていただいております中で、海外の生徒さんたちと一緒にやって一番どう感じたかということにおっしゃっていただいておりますけれども、ディベート力と、それからコミュニケーション力の必要を感じたというふうに彼は言っています、参加G7の人たちの学校ではディベートの授業がある。討論についても相当慣れているという印象を受けたと。

それから、日本では、人前で自分の意見を述べるということが恥ずかしいという傾向があるけれども、外国の、特に一緒に話した人たちは違っていたと。自分の意見を言わないということは、何のアイデアもない無能な人間だと思われるので、自分から積極的に言うことが今後必要なんだと感想を述べていただいておりますので、そのためには、やはり自分から進んで知識を増やすことが大事なんだという感想を述べられておりますので、これは上堀内さんがおっしゃっておることが、まさに桑名の子たちにも必要というんですかね、大切なことじゃないかなというふうに感じましたので。

ちょっと雑感で申しわけないですが、最初に1つ口火を切らせていただきました。

**【市長】**

ありがとうございます。

かなり議論が拡散している感じですけど、いろいろ子どもについての意見をどんどん言っていただくという感じになるんですかね。

そうしますか。皆さん、いろんな人の意見を踏まえながら、どんどん意見を交わしていくという感じのことをまずしていただいて。今日、何か取りまとめていくということではないんですよね、そういう意味ではここで。

**【教育長】**

そうですね。学力について、皆さんの共通理解を図っていきたいということと、もう一つ、私の立場からお願いしたいのは、こうやって教育大綱を皆さんと市長さんに作っていただいて、その中で、これから教育振興ビジョンというのを私どもとしてもしっかり作っていきながら、各学校へ適切な指導をしていきたいと思っておりますので、その参考になるご意見をいただくと私としてはありがたいというふうに思っていますので、もしよろしかったら、そんな方向でお話いただくと大変助かります。

**【市長】**

今、教育長からあったように、教育振興ビジョンというところに盛り込んでいくためのご意見を賜ればというふうに思っていますので。そういう意味では雑多な意見であっても構いませんし、そういうことを重点的に考えていただいても構いませんので、ここではぐるぐる回りながら、また最後、いろんな人に意見をいただくという形にしようかなと思います。

米田委員、よろしくお願ひします。

**【米田委員】**

今、プレゼンを拝聴していて、自分でそれを受けとめていく中でも思ったんですけど、社会が多様化していくのに対して、こういう子どもの学力や生活態度を捉える指標というか、捉え方が追いついていないという感じがするんです。それは結局、世代で、どんどん子どもたち、若い世代のやっていることに、親や、また、その周りの大人がついていけないということの裏返しだと感じます。

例えば、読書の時間が少ないというご指摘がありましたけれども、大人の生活を見てみても、従来のように単行本や文庫本を開く時間は確かに少なくなっているけれども、今、キンドルなどで月額料金幾らで本を読むのは読書に入らないのかとか、あとは、スマホで朝、日がわりでコラムとかがありますから、そういうウェブニュースなどでコラムを読むことは読書ではないのかとか。

あと、新聞を読みますかはないわけですね。毎朝、スポーツ欄にせよ、テレビの紹介にせよ、とにかく読んでいるけれども、それは読書の中に入れるのかどうかとか。

そういった、とにかく文字を読んでいるかどうかということがこの中に含まれていないので、多様化するのに合わせて、こちら子どもへの問いかけを変えていくとか、または、子どもが、僕はこうだけど、読書はしていないけど、こうはしているよというのをもっとフリーに吸い上げるとか、今そういった時期に入っているのではないかと感じています。

**【市長】**

確かに、情報化が進んで、紙媒体だけではないですよ、そういう意味でね。情報量は何十年前の何百倍、何千倍に増えているというのがあって、そういうところの、ここでも指標がほんとうに正しいのかどうかということも含めて考える話ということですね。

【米田委員】

そうですね。

【市長】

あと、おそらく、昔は結構、単一的にわかりやすかった時代がほんとうに多様化されて、私の子どもころも、こんなゲームばかりしておったらだめだよと言われましたけれども、今やゲームばかりしている子がアプリを開発して、何千万、何億と儲けるとか、結構価値観がほんとうに変わってきている中で、どういう教育をしていけばいいのかというのを、大人全体に対して言えることなのかもしれませんけれども、我々の提供できる教育という部分でどうやって考えていくのかというのが1つの大きな課題なのかもしれませんね。

ありがとうございます。

次、稲垣委員、よろしくお願いします。

【稲垣委員】

今のプレゼンを聞いての感想からいきますと、私は日ごろ、会社とかの教育に携わっているんですが、一番多い依頼は、どうしたら部下のやる気を引き出すかとか、要は主体性を引き出すかというニーズって実はすごく多いんですよね。

どういうふうにリーダーたちは見ているかというのと、やる気はあるように見えると、素直でいい子たちなんだと。でも、言ったことはやるけど、それ以上はやらないとか、そういうのが組織に蔓延していて、実際、組織全体の力がなくなってきているというのが、会社で起こっていることが、あっ、小学校でも起こっていたんだという、そうかというのが結構あって、やっぱりこれからの社会を思うと。

今、どういうことが組織で起こるのかというのと、結局、リーダーに全てしわ寄せがくるわけですよ。多忙なリーダーで、今50代とかで英語を一生懸命勉強しているリーダーとかがすごく多かったりとか。要は、リーダーになるということにすごくハードルが高くなってきているということが実際、主体的に動くということに対して非常に難しくなっているんだなということを感じたんですよね。

今回、学力なので、じゃ、どうしたらリーダーというか、リーダーじゃなくてもいいんですけど、社会できちんと自分の力を発揮していけるようになるかというときに、じゃ、実際に学力がつけばいいのかと思うと、実際、いろんな企業さんに行くと、いや、うちの優秀な大学を出たあの方が組織で問題を起こしているという相談が実はすごく多いんですよね。どこどこ大学なんだけど、コミュニケーション不全だと。全然とんちんかんなことを言ってしまうとか、組織のコミュニケーション不全でいろいろなこと。

かと思うと、やっぱり学力ではなくて、ちょっと本を持ってきたんですけど、伊藤さんからもご紹介いただいた『「学力」の経済学』とか、『データが語る子どもの実態』とかがあるんですけど、学力の裏側にある非認知能力と呼ばれているコミュニケーション力だったり、相手と協調する力だったりとか、やり切る力とか、そういうものが、結局社会に出てもそこが問われてくるという時代ですよ。

それを学校時代にどうやって身につけるのか。やっぱり学校の勉強と色々な軸があると思うんですよね、体力とか、運動とか、いろいろあると思うんですけど、学力、勉強という軸でそういうものが身につけられるようなかかわり、やっぱり先生。なので、多少のギャップですよ、さっきの授業づくりの先生の意識と子どもの意識の違いみたいなものをやっぱり埋めていくための何

か、もしかしたら先生のコミュニケーション力だったりするのか、双方向にかかわれるような力なのか、やっぱりやり切らせていくような力だったりとか、そういうところから何かやっていけるといいのかなというのを改めて思いました。

**【市長】**

確かに、今おっしゃったように、ギャップがあるということは、どこかでコミュニケーションがとれていないということですね、そういう意味では。先生はできていると思っていながら、生徒は別にそうと思っていないのは、おそらくそういうことなのでしょうね、そこはね。

**【稲垣委員】**

そうですね。だから、言われたことをやっていけばいいという風潮、あるいは言ったことをやっておけよというコミュニケーションというか状態が、今の社会では通用しないというところから考えていかないと、ほんとうにさっき言ったグローバルなところでは、日本としていろいろ問題が出るのかなというのを感じました。

**【市長】**

ジュニア・サミットの上堀内君という代表で選ばれた子を見てみると、大変優秀だなとわかるわけですね。それは、知識があるとかそういうことでは全くなくて、飛び込んでいく勇氣といいますか、外務省が温泉は入れませんと、G7の子たちは温泉には入れません、個室のお風呂に入りますと言ったのに、彼が温泉に行こうぜとみんなを温泉に連れて行って、日本の温泉文化に感動して、彼はまたそこでよりコミュニケーションがとれるようになったということです。

そういうのができるというのはほんとうにすばらしいなと思いつつ、将来は医者になりたいと思ったけれども、外交官になりたいと思いましたが。どんな子だと、すごい子だなと思いましたがけれども、果たしてそれはほんとうに、稲垣委員がおっしゃるように、ああいう子を教育で育てられるのかといいますか、本来的に持っているものもあるのかもしれませんが。

**【稲垣委員】**

そうなんです。ちょうど図があるんですけども、まさにそういう社会性とか対人積極性みたいなところというのは、やっぱりベースに受容感とか、自分ではできるという効力感とか、セルフコントロール、要は我慢できるとかという、そういう力があつた上なんです。でも、社会に出ると一気にここを問われるので。やっぱりこのベースは、ほんとうに家庭が50、学校が50だというふうに思うんですよね。

家庭を変えるってなかなか難しいとは思いますが、やっぱり学校で50できるのであれば、今すごく思うんですけど、1年生で出てきて、あっ、この子やばいかなと思った子は6年生でもやばい感じが続きますよね。あれをやっぱり変えていくというのは、この部分ができるようになる、ここに何かアプローチできるようなかわりをしていく必要があるのかなと思います。

**【市長】**

結構、今回の調査を見ていると、自己肯定感が高いと出ていますよね。いじめもやっちゃいけないとか、すごくみんな真面目にいいことを書いているんだけど、何となくこうやって書いておきや喜ぶんじゃないかというのも結構いるんじゃないかとかがあつたりとかして、そこにいかに踏み込むかというのと、先生がそこまで踏み込めるかどうかですね。それじゃ、先生のコーチングみたいなことなんですかね。

今、私たちも、ダイバーシティというか、イクボスということで、やはり人がどんどん減っていく中で優秀な人を採用していこうと思うと、多様な人材を評価できるようにしていかなきゃい

けないということに取り組もうとしているんですけども、今、多分、学校って子どもたちのほうが多様化していますよね、見た感じといたしますか。国籍も違う子もいたり、家庭の環境が違う、まさにダイバーシティだと思いますけど、その子たちに学校が何か合わせていくというような必要もあるんだろうなということはあるんですよ。今までの教育の考え方とは違う評価をしてあげるということも必要になってくるでしょうね、それは。

ありがとうございます。

次、佐藤委員、お願いします。

**【佐藤委員】**

このプレゼンを拝見しまして、非常に興味深く数値の結果を見ておりまして、数値から読み取るものが何かというところが非常に大事かと思うんですけども、この資料の質問を含めながらお聞きしたいんですけども、特に、国語Bにおける無回答率が非常に減ってきたというお話でございましたけれども、これは、実は私としても非常に興味がございまして、減ってきた理由として、どういった取組をされてこういうことになったのかとか、これ以外でも学力調査で全国平均よりも上になったということは、一般的に全国共通の指導要領があって、それに基づいて実施しているにもかかわらず、それを超えるような結果になったというのは、やっぱり特徴的な努力をされてきたからなのかなというふうに思うんですけども、そういったところが非常に興味深く拝見しました。なぜそういう結果になったのかというところですね。

今回の新しい学調では、テーマを持って取り組まれたということなんですけれども、その結果が、先生がこういうような指導をしているということと、生徒がどういうふうに受け取ったかというギャップに反映されているというのも1つあるかなというふうに思っていて、もっと言うと、私も小学校のときに勉強してきましたけど、じゃ、その勉強が今、社会人になってどういうふうな役に立っているかというのは、小学校の時点では全然わからなかったと思います。今になって、あっ、ああいったことが小学校のときの勉強で役立つなというのは思うことがありますけど、そういったところ、目当てというのをしっかり特徴づけられたほうがいいかなというふうに思います。

先ほどもちょっとお話が出たんですけども、社会人になって、今一番よく思うのは、確かにコミュニケーション能力とかというのは、一番、学校時代に教育されるには、親としても希望されていることだと思いますけれども、入ってよく感じるのは、いろんな力が必要だと思うんですけども、やっぱり自己管理能力というのは非常に重要なというふうに思っています。

というのは、高校でも、大学でも、就職してから3年間での離職率が非常に高いわけですね。3割とか4割ぐらいあるわけですね。その内容というのは、やっぱり社会に入ってからギャップに耐えられないというところがあって、それは給与面であつたりとか、仕事内容であつたりとか。要は、自分につらいことや何かあっても、この道を歩むんだというところの力がちょっと足りないとか、時間とか、目標に対する管理ができないというところが非常に社会人になってから感じています。これは必要じゃないかなというふうに感じています。

そういったところが何か、小学校から、そして、高等教育に至るまでの間に養っていければなというふうには思っています。

あと、1つ、これは単純な話なんですけど、家庭学習の時間が少ないという話がありましたけれども、この家庭学習の中には宿題とかというのは入っているんですか。

**【指導課長】**

入っています。

**【佐藤委員】**

おそらく、うちの子どもも、アンケートをとると、家庭学習の中で、宿題をやっているから、それが学習だという話なんですけれども、そうすると、宿題の量とかも関係してくるんじゃないかなということなんです。自分から、みずからの学習とまたちょっと考え方が変わってくると思うんですけど、そういうところ、まとまりのない話ですけど。

**【市長】**

最初の無回答が減ってきた取組はどんなのをしているかということを経理局からいただきましょうか。

**【指導課長】**

指導課でございます。

無回答率が減ってきたことにつきましては、これは非常に高いぞということのご指摘があつてから、事前に担任が教室で指導する際に、やっぱり最後まで諦めずに書きましようというあたりは、子どもたちに丁寧に指導したりということが1点あります。

それと、書けないというあたりがなぜかということも考えさせていただいて、小学校というのは、もともとドリルというのは問題と解答欄とが1枚に入っているという、そういう形のテストに子どもたちは慣れていて、全国学調というのは問題用紙と別々になっていて、テストそのものに慣れていないところもあったのではないかとということもあつたり、前もって前年度の問題をやるという取組をされたところもありますし、三重県のほうも、みえスタディ・チェックということで、三重県独自のテストもされるのと同時にワークシートをつくってくれまして、そのワークシートを使って、よく似た問題、学調に出るような問題も含めて、子どもたちが家庭学習、あるいは先生が授業の中で少しこの場でやってみようという取組なりをしてもらうということもあつて、子どもたちは問題にもある程度慣れ、先生のほうから丁寧に最後まで書きましようということで、励ましも含めてやっていった結果になっております。

**【市長】**

今、佐藤委員からも、目当てが大切というか、小学生のときはわからなくても、大人になったときにあれが大事だったとわかるというのはそうだろうなというふうに思いますし、もしかしたら、今のギャップ、目当てを先生は言っているんだけど、子どもたちがそこを理解できていないという部分ももしかしたらあるのかもしれないね、1つは。

**【佐藤委員】**

そうですね、それは大きいですね。

**【市長】**

その中で、特に経営者目線といいますか、やはり自己管理能力という部分は確かに大事だなというふうに私も思います。おそらく、さっき我慢をすることがいろいろその先につながるという話も稲垣委員からもありましたけれども、ここが多分、学校でもうまく養えていないし、おそらく、そこを養える家庭もあれば、そこに対して全く力を入れることができない家庭もあつたりするということにもつながって出てきているのかなという感じはありますね。

宿題の量というのは、確かにそれはこれもいろいろ、また量をうまく設定していけばいい部分もあると思います。

では、次、松岡委員、よろしく申し上げます。

**【松岡委員】**

私は、小学校のころは家庭学習ってほとんどやらなかったもので、宿題も含めてですけれども。やっていたのは、桑部の山の中に秘密の基地をつくって探検していたんですよね。崖登りとかをやっていたので、今やったら補導されたかもしれない。そういうことで、私の話はバイアスがかかっているかもしれません。

まず、学力調査ですけれども、全体をぱっと見て、大体全国レベルであって、総じてそんなに悪くはないなという印象を持っています。

特に、多くは誤差範囲みたいなものですが、学校に行くのは楽しいというので、小学校はもしかすると誤差範囲かもしれませんが、中学校は3年間を通じて、これは明らかに高いですよね。だから、これはかなり誇っていい、前もあつたかもしれませんが、桑名のいい教育の状況だなと思うんですね。楽しい中で勉強が続けられていると、そういうことですよね。

それで、学力について言いますと、学力はあるにこしたことはないので、上がるような工夫、努力をすればいいわけですけれども、学力だけが素直に上がればいいですけれども、学力を上げるために何かやると、何か失われるという代償を伴うので、スパルタ教育をやれば、それは上がるかもしれないけれども、楽しいのが減るかもしれないということで、考えが必要ということですね。

多少きつくしても、学力が自分たちは上がったなという、やればできるんだということで満足感が上がるかもしれないけど、それはかなり注意しながら進めないといけないのかなという気がします。

学力については、説明いただいたように、要は長い文章題は難しいと。それから、込み入ったのもちょっと失敗してしまうと。そういうことかなと思うんですね。公式に簡単に当てはめられるようなものはできる、そういうことですね。子どもたちも大人もそうですけれども、短い問題って大好きなんです、クイズ形式にすると。テレビでもみんな見ますよね。ああいう形のは好きだけれども、じっくり考えて間違わないように答えを導き出すというのはちょっと苦手、大人もそうですけど、そこら辺をじっくり取り組むということをやるといいのかなということですね。

学校の中では、そんなに時間的にはないから、結局、これを見ると、ゲーム、携帯と、家庭の中の時間の配分とか、そういうことになってくるのかなと思いますね。

わからなかったのが、学校以外の勉強時間という、そういう見方で僕はいいと思うんですけれども、塾でやっていけばそれはそれでいいのかなと思うんですけれどね。その上で、全国で桑名市の子どもたちは学校以外で勉強していないのか、しているのかというのを見られるといいのかなと思います。

**【市長】**

ありがとうございます。

家庭学習は全然で、山の中で。

**【松岡委員】**

あれは無駄にはならなかったと思ったんですけれどもね。

**【市長】**

最近はこういう、私も山の中で生まれ育ちましたので、そういう遊びもやったりしていましたが、やっぱり時代も変わってきて、山で遊ぶとか秘密基地をつくるというのはほんとうに危ない遊びだからやめなさいみたいな、そういう方向性もできているのは少し、何となく心配は心配ですね。

**【松岡委員】**

今考えれば危ないところもあつたなと思いますけど。

【市長】

大きくなってみると、よくこんな崖を登っていたなとかね。

【松岡委員】

そうです。

【市長】

そういう意味では、そういう視点からということもあるのかなと思いましたけれども、学校が楽しいのは、確かにこれは素直に誇るべきことだというふうに思いますし、そういう意味では、学校で、楽しいところで勉強できるというのが大変いいことだと思うので、この強みをどうやって生かしてこれから取り組んでいくかというのが大事なのかなというふうに思いました。

それから、やはり問題でも基礎的なものというか、瞬発的な判断みたいなことはかなり子どもたちも得意ですし、多分一問一答式問題みたいなことはすごく簡単にほとんど答えられるし、多分、時代的にもそういうのが楽しい、SNSで誰かのLINEのように判断し、すぐに送り返すとか、そういうのがすごく上手な子たちなんでしょうけれども、逆に、じっくり考えるというか、同じことを、1つのことに集中して時間を使って何かするというのが苦手なのかなという感じはありますね。

確かに、読書の時間が短いとか、そういうのを考えると、何かに腰を据えているいろいろ取り組むというような体験をさせるのが大事なのかなというふうに思いました。

あと、学校外の時間をどうやって使うのかということが大事じゃないかということでしたので、ここは家庭の学習なり、また、塾なり、また、山の中で遊ぶとか、そういうことも大事な時間の使い方だと思いますので、そのあたりは、これから議論していきながらやっていけばいいのかなというふうに思います。

ありがとうございます。

では、伊藤委員、よろしくお願ひいたします。

【伊藤委員】

先ほど稲垣委員が『「学力」の経済学』って紹介いただいて、もう一つ教育委員会では紹介させてもらったんですけども、『学歴の経済学』というのがありますので、そんなものも一度読んでいただいて、ほんとうに学力って何をつけたらいいのかということを考えていただければなというふうに思っています。

それで、今、プレゼンしていただいた中で、私はほんとうに、学校が楽しいという子が90%ぐらいいまで来ているんですけども、残り10%の子も高校進学はしているわけですよ、もう今進学は98%ぐらいい高校へ行っていますから。

そうするとどうなのかということ、義務教育のあり方として、私はこの辺が一番大事なところではないかなという気がします。それが例えば、気になる実態というところのパーセントと結局は一致しているんじゃないかなという気がするので、やはりその辺をどうしたらいいか。

先ほども家で勉強しないと。これも、家で勉強する家庭環境にはなっていないような気がします。だから、私らのときはよくあったけど、今はもう学校に残してというのはなかなか、通学の安心・安全ということで難しい。塾へ行っていないくたって、ある程度のところはみんなできるように、そのある程度はやっぱり義務教育で絶対つけないといけない。ほったらかしておいたら大変だということ、これは認識していただいて。

今度、アクティブ・ラーニングでは、特に主体的に自ら学んで、そして学修というのは、学び習

うじゃなしに、学び修めるという漢字を使って学修というふうなことを言っています。だから、修めないといけない、わからないといけない。でも、わかったから1年後に覚えているかといったら、それはまた別の話ですので。定着というのは、私も自分自身が今習ってきたものをほとんど忘れていきますから、大体それは難しいと思いますけど、そのとききちっとわかるということが学校の楽しさにもなると思います。

それから、私、高校の学校評価委員を2校やっているんですけども、そのときに2校ともに言っているのは、学ぶ意義を先生が生徒あるいは児童に話ができるかどうか。それが単に、それでは就職できないよとか、それでは大学へ行けないよというのなら、いや、その大学へ行かなければいいんだ、その会社へ行かなければいいんだと簡単に諦めてしまうので、やっぱり学ぶ意義というのを語れるように、お互いがね。それはあえて時間をとる必要はないんですけども、何かのときに話し合えるということが非常に大事。ところが、今、若い先生、学ぶ意義ってなかなか言えないと思うんです。というのは、私も学ぶ意義がわかったのは大学ぐらい。

先日も、ノーベル賞の天野さんの講演を聞きに行ったんですけども、ほんとうに天野さんも大学へ入って初めて学ぶ意義がわかったと。それは、天野さんの話だと、工業の工というのがあって、こうあって、こう、人と人をつなぐために学んだというふうな工業教育概論でそれを学んだという、ああ、なるほどなど、自分も工業出身ですからね。

だから、そういう役割が学ぶことであるんだというふうな、やっぱりそういう先人の、そういう機会もなかなかもう最近時間をとれないところがあるので、先人の話を聞くというのは難しいところもありますけれども。

それと、やっぱりずっと見ていると、小学校、中学校あるいは高校で勉強していることが、ほとんど生活と離れていき過ぎた。私らのときは、生活ともうちよっと近かったような気がするんですよ、それがまず1点ですね。

それで、2点目は、正解だけを求める子、これが、よい結果を求める。これは授業参観のときにびっくりしたんですけど、児童が当てられて、間違っているかもわかりませんがこう思いますと言ったんですね。えっ、そんな前の言葉は要るのかって、間違っているかどうか、そんなことを。ものすごくそんなところが気になって。

3つ目は、やっぱりどのように自分が学ぶか、そして、それを何に生かせるかというところへ、子どもが。それが、私は生活にだと。この前、教育長さんに言ったんですけど、天秤の授業をしていて、ただ天秤の授業だけしている、理論だけ。シーソーでどうのこうのという話をちょっと入れてくれたら、生活ともものすごく密着してくることになる。

というのは、なぜそうなるかという、先生にそういう経験がないから。だから、今、松岡委員がおっしゃったいろんな遊びでというのは、私は松岡委員よりもっと遊んでいるものですから、そういう点では遊びというのは大事なんですけど、遊びというと、今の保護者の方は、そんな無駄な時間というふうになってしまうので、それがさっき言った、すぐ成果を求める。今、競争の社会で当然なんですけれども、大人は働いて成果を上げないとほんとうに大変になる。でも、それを子どもにも学ぶときからそれを求めると、これは、やはりもう小さな卒にはまった子だけを作っていくような気がするので、先ほど市長さんが、ゲームして遊んでいる子がアプリの会社を作って、それで金も儲ける。別に金儲けだけが幸せではないんですけど、でも、そういうこともできるということ。それなら勉強しなくてもいいかという、それを言うと、基礎、基本は絶対知ってもらわないと、それを忘れたら大変なので。だから、そんなところを1つ、大変ですけどしてほしい。

基礎、基本は、桑名市は100%理解して、どんな子もというふうなものにしてほしい。

そういうふうにしないと、二極化ということを教育がカバーしていないということになってしま  
うので、やはりその辺を力強くやっていただきたいなという気がします。

#### 【市長】

ありがとうございます。

伊藤委員からも言われた部分の、学校が楽しくないという10%、多分、家庭の実態とかを見て、  
厳しい家庭もあるなというところとリンクしているんじゃないかと。確かにこれは重い課題だなと  
思いますね。

これは教育委員会じゃなくて、私どもの市長部局のほうで学びサポート事業とって、生活困窮  
者自立支援法の中で、生活困窮の方で教育的な支援を必要とする人にはサポートしようというこ  
とで、いろんな団体さんとかと連携してやっていますけれども、おそらく数が追いつかないです  
ね、今のお話からすると。

そういう意味では、もう少し違うサポートの仕方を全体で考えていかないと、どんどんこぼれ  
落ちていく、要はサポートを受けられない人たちが、そういうところには格差が広がっていく  
という課題になっていくんだろうなと思いましたので、これは我々としてもしっかり取り組まな  
いといけないことだと改めて思いました。

やっぱり短期的な利益と長期的な利益というのは結構大きな問題だなと思っていました。  
短期的なところは、みんなもう得意、わかりやすいし、得意なんですよ。

子どもたち、この前、小学生の子が市役所参観に来てくれて、一番盛り上がった話題は、市  
長さん、ポケモンGOしていますかという質問をされたんです。僕は今レベルこれこれだとか  
いう話をしたら、子どもたちも得意なわけですが、ああいうのは、めちゃくちゃ説明して  
くれて、もう何かよくわからないけどすごいなみたいなことを言ったんですけど。短期的  
の中でレベルを上げるとか、そういうのは非常に得意なだけけれども、ただ、長い視点  
での、例えば人生とか、そういうふうに見たのでは見えていない部分があるので、そ  
ういうのをいかに教えていくのかというのはすごく大事だなと思いますし、その中で、  
公務員というのは大変長いスパンの中で40年ぐらいかけてこの桑名のまちをこう  
していくとか、桑名の教育をこうするんだという視点があるので、そういう視点から  
子どもたちに伝えることというのは、おそらくまた1つあるのかなというふうに思  
いました。

あと、やはり生活と離れているというか、桑名の先生が若返っているということもある  
んですけど、おそらくその方たちって、どっちかというところでは山ではないところで  
勉強を一生懸命して、教育で子どもたちに伝えていこうと思って先生になった方  
たちなので、あまり体験というものはどうしてもやはり少ないという部分がある  
のかなというふうに思いますね。その人たちに体験させるって、なかなか今からは  
大変かなと思いますけど。

#### 【伊藤委員】

そうですね。小学校のときに遊べるといいんだけど、今はなかなか子どもたちが  
それぞれみんな予定があって、学校でも長いこと遊んでいられないし、公園はまた  
難しい、ボールを投げても怒られるし。

やっぱり社会全体が決まり切った枠の中で、安全ということで全ていこうとすると、  
命は大事なんだけど、そういうのをかいくぐりながら、耐えながらいかないと。それ  
でも、そんなことを言ってもいけないので、今ある環境の中で何をしたらいいか  
なということしていくと、私はよく、本物に1年1回は直接お話しを聞きなさいと。  
先ほどの天野さんの講演も自分で、もちろん何万円と

払って講演を聞きに行くわけですけど、やっぱりそういうことを学校なんかでも。市長さん、たくさん予算をつけてもらって、1校に1年に1回ぐらいは、本物を呼べるということが、私はものすごく大事なような気がするんです。ほんとうに話がうまいですね。

#### 【市長】

予算があれば、しっかりと本物に触れられるようにしたいと思います。

最後、少し私も話をさせてもらおうと思いますけど、私が特に学力調査を見て思ったのは、文科省は本気だなというのを思ったんですよ。やはり基礎と応用という部分を考えてときに、おそらく文科省視点で見えていないといいますか、おそらく世の中全体のところから見て、応用の部分というのが非常に複雑なものをつくってきているから、それに学校現場がほんとうに耐えられるかどうか、どこまでついていけるのかというのがすごく大きな課題ではないかなというふうに思います。

今日紹介された内容以外にも、私、全部見えていますけれども、もう何の試験かわからない問題がいっぱいありますね。算数なのか国語なのか理科なのか社会なのかかわからない問題というのが出てきていますし、デザインから読み解くとか、おそらく昔は全くなかったことでしたし、奥付って今年でしたっけ、あれ、ついていたのって。本の奥付。

#### 【教育長】

今年です。

#### 【市長】

あれ、今年でしたよね。本の後ろに書いてある奥付から情報を読み取って問題を解くというのは、かなり世の中を見て、その世の中のいろんな多様化に合わせて問題ができてきているので、子どもたちもさぞかし大変だというふうに思いますし、ほんとうに先生たちがこれからどうやってかかわっていくのかって、すごく大きな問題なんじゃないかなというふうに思います。

アクティブ・ラーニングということで、これから大きく変わっていく時代なので、それは私たちも、社会が多様化しているというのはもう認識はできているんだけど、そこに学校の先生たちが、先ほども、そういう意味では、伊藤委員からおっしゃっていただいたように、教えることにはたけているがいろんな経験がない先生が、アクティブ・ラーニングというものを、学を修めるところまで持っていくにはどうやってしたらいいのかというのは、すごく大きな課題なんだなというふうに改めて思いました。

そういう意味では、桑名の子どもたちが学校は楽しい場所というのが1つほんとうに大きなことだというふうに思いますので、そういう意味では、おそらく学校が楽しいということは、先生のことでも好きなんだと思いますから。なかなか家庭の状況は確かに千差万別で、もうここで家庭教育、弱いからこうしましょうとおそらく一概には全部言っていけないのかなというふうに思いますけれども、ただ、弱い部分は我々も、市長部局のほうからもしっかりサポートさせていただきながら、やっぱり楽しい学校の場所で、いかにいろんな人とつながりながら、連携しながら子どもたちを育てていくのが大事なのかなという気がします。

そういうわけで、いろいろご意見もいただきましたけれども、また、このあたりは後でいろいろ、ビジョンのほうにうまく反映していただくということでお願いをしたいというふうに思いますので。

それでは、次に、事項書の2ということで、これからの時代を担う子どもたちに求められる「学力」についてということを議題としたいと思います。

事務局から説明をお願いいたします。

【指導課長】

まず、今日の冒頭でもございましたが、本年度は、教育大綱を受けてくわなっ子教育ビジョンということで教育振興計画を作成してまいります。

検討委員としては、幼稚園、小学校、中学校から園長、校長、教頭の代表と教員代表に入っただきまして、8月30日から5回の委員会を経て、教育振興計画を作成してまいります。2月には教育委員会のほうへ出させていただきます、ご承認いただけるように作成してまいります。

今、皆さん、委員さんのほうからお話しいただいたことも踏まえて、検討委員会のほうへは反映をできたらなと思っておりますので、今からの学力向上に関する部分につきましての一助となるご意見のほうをいただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【教育長】

最初いいですか。

【市長】

そうですね。教育長、よろしくお願いいたします。

【教育長】

学力ということについては、保護者の方々とか、あるいはそれぞれの関係の方々とやっばり捉え方が大分違うと。

最近、ちょっと二、三の保護者の方と話をさせていただいたときに、いわゆる基礎、基本と言っています読み書きそろばんというんですか、それに英語とパソコンが入ったぐらいだと思うんですけども、その部分だけではなくて、思考力とか判断力とか表現力という部分もかなり保護者の方が意識しているということを感じさせていただいたと思っております。

今の自分の子どもさんの学校の授業で、ほんとうに思考力がつくんですかと。もうちょっと話し合いをしたらどうなんですというような意見が保護者の方から聞こえてくるということがありまして、学力の捉え方についても、我々自身がもう少し広く考えていかなければならないのではないかなと思っておりますと、それから、先ほど稲垣委員がおっしゃっていただいた、言ったことはやれると、言ったことはやれるんだけど、それ以上自分から進んでというところがやっばりないんじゃないかということ、それから、佐藤委員がおっしゃっていただいた自己管理能力とか我慢できる力、あるいは伊藤委員がおっしゃっていただいたような形のじっくりと考えるというような部分を自分なりに解釈しますと、これからは言ったことをやるというのは、人工頭脳が、この間の将棋もありましたし、それから囲碁の世界でも、コンピューターのほうが勝っていたということもありましたし、この間、医療の関係でワトソンでしたか、癌を手術できたのでというようなことも聞いていますと、これから、稲垣議員がおっしゃっていただいたような言ったことをやるというのは、おそらくコンピューターとか人工知能がやり得るところだろうなと。そうすると、これからの子どもたちが社会へ出ていったときに、その部分のキャリアが活かされずに、もう少し違った面の、それこそ人生をというか、お互いに幸せになるとか、コミュニケーションの部分がこれからはかなり学力の中で大事になってくるのかなと思ったりしますので、今の、おっしゃっていただいたようなことをもうちょっとお話しいただきたいなと思っております。

もう一つは、大学入試が2020年から変わるという状況でして、今のセンター試験はもうなくなりまして、新しい、いわゆる記述式のというんですか、マークシートじゃなくてというようなことになってくると思っていますから、その辺も含めて学力の議論をしていただくとビジョンのほうにも反映しやすいかなと思うので、注文ばかりして申しわけないんですが、そんな思いをしております。

## 【市長】

確かに、今、人工知能はかなりレベルが上がっていて、今ある仕事の何割かがもう人工知能にとってかわるというような、そんなことも言われているわけですがけれども、その中でどういう子どもを育てるのが大事なのかみたいなことを、そういう大きな視点でご発言をいただければと思います。

## 【伊藤委員】

今、人工知能の話が出たのでちょっと紹介しておくと、先ほど、『学歴の経済学』を書いた人によると、人工知能が発達してきたら、いわゆる中間管理職的な人は不要になると。取締役の人は要ると。その下で技能的に働いたりする人は要ると。そういうことを言っていました。大変な社会になると私も思いましたが、でも、私は、その人工知能をつくるのも人間ですから、人は絶対必要だと思います。勉強の学力について私なりにちょっとまとめてきたので、教科的にはどういうことが必要かとかいうので、教科的には4つ、領域的な学力と観点別の学力、それから見えやすい学力と見えにくい学力。基礎的な学力と生きる力の学力。それから、もう一つが、やはり世界的に標準的な学力、これはトップを歩んでもらわないといけない。

先ほど、大学入試が変わるといって、アクティブ・ラーニングから何を、先ほど学修と言いましたが、学び修める、それによって得なければならないのは認知的な力、それから倫理的な力、社会的な能力、そして教養、知識。一番先に認知するという、そして、次に倫理的という。

今度、大学入試でもそういう1つの問題が出て、これをなぜそれが倫理的にという論述の問題が出そうです。だから数学から、倫理の話から解かないといけないというふうに、センター試験にかわるんじゃないかと、各大学でする試験がそういうふうに変わっていくというところがあるようです。

そういうことで、自分がそうなんですけれども、子どもたちに根拠のない自信、私ものすごくそういうところがあるんですよね、そういうのをつけてあげてほしいな、何かの証拠があるわけじゃないんだけど、やったらできるんだという、そういう自信を。

最初に結果主義とか、成果主義と言ったのは、過程を褒めない。今、子どもさんも努力している過程を褒められないんですよね、特に家で。そういう過程を、子どもがこんなに一生懸命やっても褒めない。三重県がそうですね、学調が、毎年上がっているんだけど、全国からいうと、全国も頑張るから順位的にはそんなに上がらない。それでも大分上がっているんだから、それを褒めるということ、やっぱりそういうことだと思いますので。

それと、学力じゃなくて、文科省も言っている主要能力ということで、キー・コンピテンシーという3つ、それをやっぱり能力としてはつけるというところへつなげていってほしい。ただ単に学力だけを論じていくのではなくて、そっちの能力のほうも。頭に入っていればそういうことが言えるんだけど、度外視していくといけないのかなという気がします。

ほんとうに先生方、大変だろうなと思いますけれども、もうそういう時代になってきているということで、頑張ってくださいたいと思います。

## 【教育長】

ただ、今おっしゃっていただいたように、やっぱり現場の先生たちは、まだそういう感覚に少し遅れているなという感じます。やはりそれに早く気付いてもらわないといけないということも思ったりしているんです。

## 【市長】

AIができる学校は先生は要らなくなるんですか。

**【教育長】**

それは言われていますね。

例えば、講義調の先生だとそれは要らないと。例えば、今、衛星放送みたいなのがあるので、タブレットの中へ入れて、それで勉強すればいいと言われるんだけど、ただ、今おっしゃったように、みんなが、一人一人が協力して、クラス全体がチームとしてというんですか、1人も取り残されずにみんなが高まっていくという経験をするのがこれからの社会の中で非常に大事だと。そういうふうになると、そう仕組むことができる先生というのは残るだろうと。だけど、今、黒板だけを使ってやっている先生とか、知識だけを切り売りしているような先生だったら、もう要らなくなるんじゃないかと言われていています。

**【市長】**

塾みたいな先生からコーチングじゃないけど、多分うまく引き出すとか、チームをつくるとか、そういう方向に先生の役割も変わっていくんでしょうね。そうしないとAIにとってかわられると。

**【松岡委員】**

私は、AIは、子どもの質問に対して適切な回答を返すようにインタラクティブなところまでいくと思っています。

**【市長】**

そうするとなかなか。

**【伊藤委員】**

多分そうですね。

**【市長】**

できますよね。だって、今、カスタマーサービスとかは、基本的に全部もうAIでできますもんね、やろうと思えば。そうやって考えると。

**【伊藤委員】**

一番人件費が、経済的な状況からいくと、そこをどうやって省くかということからいったら、当然あり得ると思います。

**【米田委員】**

でも、教員経験者の先生方がそれをおっしゃってはと思うんです。ちょうど、昨日まで石取をやっていて、同じ会の中に介護の仕事をしている人がいて、人件費の、外国から介護の方をお招きしたりということもあるんだけど、またそれがやっぱり人工知能にとってかわられると言っているけれども、言葉を失ったおじいちゃん、おばあちゃんの雰囲気を見て、あっ、お茶とかお水、もう一杯おかわりを出そうとか、今、ちょうど眠いころだから10分後にもう一回来ようとか、そんなの誰ができるのといって怒っていたんですね。

だから、やっぱり勉強のわからないところを、私はこれこれこれがわからないので教えてくださいと子どもが言えるんだったら、その子どもはわかっているわけですよ。何をどうしていいのかわからないから、それを顔色とか足先のもじもじしている感じとか、言いたいんだけど言い出せないところから、そこへ行って何かわからないって、周りの子に恥ずかしくないようにどこがわからないって指さしてここ、ここ、ここと言えなきゃ先生じゃないじゃないですか。

というのを教員経験者だったら皆さんなさっていることですから、やっぱりそこは、先生方は遅れているとかいうことは決してないと思うんです。

**【伊藤委員】**

今の話で言うと、例えばA Iでやりながら周りを見ていくという人は絶対要るんですよ。それは、なかったらやっぱりもう集団で学ぶ必要はなくなる。教育長が言われたのは、そういうことができる人は残るんだと。紋切りにAイコールBはとかやっているようではいかんよということだと思います。

#### 【教育長】

先生自身が、先生が要らなくなるとは思っていないんですよ。でも、教師自身が変わっていかないと。だから、あくまでA Iをツールとして、道具として使えるような先生になって、それで、やっぱり一緒に体験するというか、一緒にやるということが非常に大事だと思うんです、その辺をできたら次のビジョンにも盛り込みたいなと思っているんです。その辺の意見をたくさんいただくとありがたい。石取なんかは、桑部の山に登るのと同じかもしれませんが、やっぱり地域の大きな行事として大事じゃないかなと。そこに参加することで学ぶことが多いんじゃないかなと思います。

#### 【米田委員】

ジュニア・サミットのときに、時間、30分遅れましたでしょう、皆さん到着されるのが、雨が降っていて。でも、世界から、言葉は汚いんですけど、世界から来た奴にこれから話し合いができないぐらい耳をおかしくしてやるんだという、そういう、その思いだけで雨の中、30分雨に打たれて待っているという、これ、すばらしいと思うんですよ。ほんとうに名前が出ないけど、褒めてあげべきだと思って、それでとても感動しました、桑名の子どもはやっぱりいいなと思って。

#### 【市長】

やっぱりお祭りはすごいことだし、多分、今の教師論とかぶってくると思うんですけど、A Iとか何かができたら、多分7つを完全にたたくとかできるわけですよ。誰でもできるみたいになると思うんですけど、それは祭りの本質じゃないんですよ、おそらく。

そういう意味では、みんなで共同体として、祭りに誇りを持って地域を愛するみたいなことというのは、多分A Iではとってかわれないことだと思うので、まずはそういうどこが本質なのかみたいなことが問われてくるというか、それを問いながら前に進めていかないと。ただ単に、太鼓を5つでたたくのが石取祭ですではないということなんでしょうね。

やっぱり教員というのもどうあるべきかということも常に問い続けることが大事ななと思っております。おそらく経営者というのは大体、また言ってくれるんじゃないかなと、経営者の人が見ているA Iと、中で働いている人が見ているA Iって全然違うと思うんですよ。経営者からしたらいわゆる武器ですよ。さっき伊藤委員に言ってもらったように、コスト削減ということを多分考えたときに、そういうふうに見えると思うんですよ。現場で働いているのであれば、僕と同じ年くらいの、例えば企業で働いている人間からしたらものすごい怖いですよ。ほんとうに中間管理職が要らなくなる時代がおそらく来るので、そのとき、俺たちはどうなるんだろうみたいな、そういう恐怖感を持って仕事をしている人間もいるということですね。

その中で、学校現場は今どうなのと。そういう恐怖感とか、自分たちは何をすればいいのかというところをどんどん問いかけながら、自分に問いながらやっていかないといけない時代にもう突入しつつあるんじゃないかなと思いますけどね。

その辺、松岡委員、お願いします。

#### 【松岡委員】

次、当たったらしゃべろうかなということについて出てしまっているのだからなんですけども、市長さんおっしゃったように、職業が変わっていくと。今ある職業が多く失われて、今ないような

職業が生まれると、そういうことですよ。今の子どもたちはこういう職に就くんだと、就いた後、就いたはずの仕事が変わっていくという、それを経験する世代になっていくと思うんですね。なので、教員もそうですけれども、職業が変わっていくということに対応できるような応用力が求められると、そういうふうな教育なのかなと思うんですね。

要は、学校で習っていないことがこれから出てくるということですよ。だから、学校で固定的なことを教えるんじゃなくて、アクティブ・ラーニングでこういうことがあったらこういうふうに対処するんだという、その対処法を学ぶというか、そういうふうに変っていくような気がするんですね。

ちょっと戻るような感じですけど、学力試験、平行四辺形の問題は解けるんだけど、公園の問題が解けなかったということで、公式としては知っている、これヒントを与えれば解けるはずですよ、公園のほうもね。それができなかったということなので、自分でヒントがなくてもあれこれ考えて、国語力もいろいろあるけれども、それを組み合わせて、あっ、何だこれ、平行四辺形の問題じゃないかということで解けるような、そういうふうな、さっきと繰り返しになりますが、じっくり考えて間違えない、適切な解答に導くと、そういうふうな訓練を続けていくと、そういうのがこれから求められる学力なのかなというふうに思います。

【米田委員】

数学が苦手なのでわからないんですけど、カとキが平行と書いてないのに平行四辺形って何でわかるんですか。カとキが平行ってここからわかるんですか。1メートル違ったら、これ、すごい違いますよ、地価で言うと。

【教育長】

指導課長、これは1番と3番だけ取り出してきてあるので、ある程度書いてあるんじゃないのか。

【指導課長】

前提のものはあります。

【米田委員】

よかったです。

【教育長】

これは1番と3番だけ取り出しているんで、前提の部分と2番を割愛しているので、多分そのあたりにあると思います。

【米田委員】

そうか、中央公園が先にあったわけですね。2番が多分中央公園の問題なんですね、平行四辺形という。

【教育長】

そうでないと、今、米田委員言われたようなクレームが全国から出てきているはずですので。

【米田委員】

さっきから私、すごい悩んでいたんで、すみません。

【教育長】

今おっしゃったような土地と絡めて考えていくことは非常に大事な視点ですよ。

【市長】

何かピンとくるというか、さっきの、例えば天秤の話、シーソーがピンときているか、ピンときていないかで全然違いますよね。子どもたちは多分ほんとうはピンとくるので、そういう子、ヒン

トというか、何かちょっと言ってやるとぱっとわかるようになるんでしょうね。

何かそういうつなげていくみたいなの、応用力みたいなのを育てる教え方ができるのかどうかですね。教えてできるものなのかな。その辺がわからないけど。ただ、そういう応用力がこれから問われる時代なんでしょう。確かに、職が変わっても対応していかなくちゃいけないというシビアな時代に生まれていますので。ちょっとその辺はしっかりと踏まえたビジョンを持つことが重要なと思います。

では、佐藤委員、お願いします。

#### 【佐藤委員】

まずは、教育現場において、A Iというか、機械化において、やっぱりもう既にタブレットで通信教育とかって始まっていますので、基本的な勉強を習得するという意味では、もうそれで十分成り立つ話でしょうけれども、やっぱり人とのコミュニケーションとか、そういったものがこれからの教育現場での必要な情報だということで、そういった方の、教員の方の指導方法というのは必ず残っていくものだというふうに思っています。

産業界においては、これ、政府もそういうふうに指導していますけれども、ちょっと余談になりますけれども、日本銀行が金利ゼロ%というのをしまして、その目的として言われているのは、今後、人口が減っていく中で、作業員というか、働き手がなくなっていくと。そこで、やっぱり企業としては設備投資をして、人にかわる機械を導入してくださいと、そのためのゼロ金利ですよと。そうすれば経済も発展しますと、こういう発想なんですね。

ですから、単純労働というのは、基本的にはもう機械化になっていくでしょうし、もっと先を言えば、A Iの話でいけば、ほんとうに人間よりもすぐれた回答ができるというぐらいに言われていますので、中間管理職レベルはほんとうに完全にA Iになっていくと思います。

ただ、一方で、機械というのは24時間稼働して、人間と違ってフルに稼働しますので、そういった点では非常にいいんですけれども、壊れるかどうかというのは、危険信号は出ないというか、自分からは発しないんですね。それを、出ているものを察知するのは、やっぱりこれは人間のところだと思います。

そういう点では、やっぱり職業訓練を受けた方が入っていただいて、ちょっとした気づきというのを察知して事前に予防すると、そういった面での人間の働き手というのは残っていくと思っています。

また、最近では、プロの料理人の料理しているところをVTRで撮って、それを人工知能に植えるわけですね。そうすると、全く同じ味で作れるというような物もあるんですね。そういった世界になるので、基本的な作業はもうやっぱりそうなると思いますね。

ただ、やっぱり、じゃ、その人の今日の体調とか、そういった面に応じた味づくりができるかといったら、そこまではおそらくできないでしょうから、そういったすみ分けは出てくるとは思いますがね。

#### 【市長】

例えば、瀬祭をつくっている旭酒造さんでしたっけ、あそこはもう杜氏という制度をなくして、同じおいしい味を機械で要はつくれるというふうにしてはいますけれども。

#### 【佐藤委員】

そうなんですね。我々の世界では、もうあれはあり得ない話でしてね。杜氏をつくらないし、全てオートメーション化しましたので。

【市長】

でも、あれをおいしいと言う人もいますけれども、やっぱりどっちかという、つくり手の、例えば食品をつくるという人は、あの人がつくっているお酒の今年の新酒はおいしかったとか、そういうのがやっぱり食べる喜びだったりすると思うので。

そういう意味で、オートメーションできるものもあるでしょうし、多分できなくて残るものもあって、そこを考えながら子どもを育てていかなければならないということなんでしょうね。

佐藤さんのところも杜氏というか、職人さんがつくっていますよね。

【佐藤委員】

ええ、おります。やはり昔は、俺の背中を見て育て、勉強しろという世界でしたけど、やっぱり今はそれではちょっと、数字を気にしながらになってきましたね。理論的にとか数字でもって教えないといけないとかですね。

昔でしたら、例えばおけの中に手を突っ込んで、もうこれぐらいで熟成終了したかなというような感じなんですけど、今はもう機械的に何度になったからこれは熟成完了ですよとか、そういった世界になってきましたね。それはもっと進んでいくと思いますけど。

【市長】

なかなかそういう職人的なすごさみたいなことをもう一回いかに再興するかとか、そこが人しかできないところですよというふうに、ものづくりの職人でもそうだと思うんですけど、そっこのほうを評価していくということもこれから大事になっていきますよね。

ありがとうございます。

次、稲垣委員、お願いします。

【稲垣委員】

さっき市長がおっしゃっていた、ほんとうに文科省の本気度みたいなものがすごくテストに、私もこれ、自分が解けて言われたら解けないと正直思う感じがあるので、やっぱり何か文科省がキャッチしている、それこそ、そういう人工知能の問題なのか、いろんなものをこれから教育という現場で多分反映していく必要があるんだろうなど。

じゃ、学力といったときに、さっき伊藤さんもおっしゃったように、ほんとうに1足す1は2ですよというレベルのことではなく、なぜ1足す1は2で、そうやっていう、そういういろんな、さっき私、非認知能力と言いましたけれども、そういうものもほんとうに植えていく必要性があるなど。

じゃ、そのためにやっぱり何かといったときに、その1つ、教師の質というのがあって、今、実際私たちもいろんな研修とかで教師の質をどう上げればいいのかというのを、実はまだ明快な答えってあまり出ていないんですよ。いろんな文献とかでも、きちんとしたのが実は出ていないというぐらい、教師の質はほんとうに難しいなど。

ただ、個人的に、やっぱり私、教師ってすごいないつも思うんですよ。人を育てるという場面、もちろん会社とかでも今すごく取り入れていますけれども、やっぱり人をうまく育てている人って、実は会社でも教育現場でも共通点があると思っていて、そんなに、会社だからうまく育てるとかではなくて、多分ここにいらっしゃる先生方は、どこかの会社の社長とかになると絶対うまくいくはずなんです。それぐらい本質は同じで、要は人をうまく育てている人って、やっぱりうまく力を巻き込んでいたりとか、任せるところはきちんと任せていたりとか、何か責任をうまく渡していたりとか、当たり前の要素であるんですけども、残念なのは、学校現場ではそれが共有され

ていないという感じがすごくするんですよ。

うまくいっている先生のことを多くの方は、あの先生は特別とか思っていたりとか、逆に個性が豊かな先生でとかになってしまったりとか、うまく使えるものとして共有されていないということがあります。なので、やっぱり授業参観とかに行っても、ほんとうに先生のレベル感ってすごくまちまちな印象ってありますよね。それは個性という範囲以上の、もうちょっとまちまち感があったりとかするので、ほんとうにうまくいっている先生のこともっと共有できる環境と、あと、やっぱり個人的なフィードバック、うまくいっていない部分はやっぱりここがうまくいっていないだよと、今こういう視点でこれから教育をやっていかなきゃいけないとか、あなたの教え方は1足す1は2だよとか、そういうのがきちんと伝えられるような、学校の先生の質を上げていくというのが1つ反映できるのかなというようなことがあります。

あとは、さっき聞いてすごく思っていたのは、桑名の売りとしては、じっくり力みたいなの、この、都会でもなく、田舎でもなく、いい環境が残っていて、でも、何か教育にも意識があって、じっくり何かをかかわれるとかということからは、何か桑名の売りとしてできるのかなと思いました。

あともう一ついいですかね。

あと、やっぱりどうしても子どもたちを育成していくときに、ちょっと東員町から聞いた話なんですけれども、やっぱり学校教育の現場だけじゃなくて幼稚園とか、4歳児ぐらいからうまく巻き込んでいくというのはすごく大事だなと思っていて、実際、この間、東員町の方と話したときに、幼稚園の先生がすごい元気だったんですよ。高校の先生がやると、ちょっと何となく肩身が狭い思いををすると思うんですけど、やっぱり幼稚園の先生とか、保母さんとかがすごい元気で、ビジョンとかをがんがんに語るんですよ。小学校の先生とかにこれなのでよろしくみたいな感じで、やっぱりあのぐらいの下からのエネルギーをもっともっと出していけるといいかなというのはちょっと思いました。

#### 【市長】

確かに、学校の先生は指導要領みたいなのがあって、大体4年生のときにはこれができるればいい、5年生のときはこれができるればいいというふうにあるわりには、教え方ってまちまちなんですよ。おそらく、個性を生かしてということになるのかもしれないけど。ほんとうは、多分もう少し標準化できるというか、そのいいものを、いい人のを標準化して行って、うまく若い人がなったとしても穴が埋められるというか、誰でもうまく教えられるような、そんなやり方がほんとうは考えられるんでしょうね、おそらく。

#### 【教育長】

多分、その辺の1つの切り口がアクティブ・ラーニングと。あれはいろいろと言われてはいますが、いろんなやり方がアクティブ・ラーニングの中にはあって、とにかく子どもたちがやる気になって一緒に取り組んでいくというところだと思いますので、それが、稲垣委員がおっしゃっていただいたように、うまくやっている先生のノウハウを共有化するというのは非常に大きな課題かなと思っていますので、市長が言われたように、標準化という部分になるのかどうかわかりませんが、それにあと個性として上乗せできるようになればいいんですけどね。その部分がぜひこれから取り組みさせていただかないといけないと思うところです。

#### 【稲垣委員】

それも実は目に見えない、教え方というレベル、それこそやっぱり先生たちの非認知能力みたい

な、そういうものがつながっちゃうと思うんですよね。

【教育長】

おそらく、教育の「育」の部分が大事になってくるのかなと。とにかく、「教」というのでも、教えるのはわりと、先生というのはよくしゃべりますし、得意なんですけれども、見守っていったり励ましていったり、それから、ちょっと後押しするような「育」の部分がこれから大事になっていくのかなというふうに聞かせてもらいました。

【市長】

任せれば多分、子どもたち同士で教え始めるとかになってくると、おそらく、まさにそれを見守れるかどうかですね。言いたくなるのをあえて言わないでね。

【教育長】

そこは、変な意味ですけど、我慢をすることが大事かなと思います。

【伊藤委員】

先生方がちょっと忙しいので、雑談で話をする時間が、特に小学校は。高校は割とあるので、意外に同じような展開をしているんですよね。やっぱりそこが一番大きいかな。それで、特に小学校だと、1クラスだと、自分のところの城さえ守ればいいというふうになってしまうので。

【教育長】

クラス1つですとね。

【市長】

見ているところがそこだけになるわけですね。

【教育長】

自分のやり方しかないですよ、確かにね。

【稲垣委員】

でも、さっきおっしゃっていただいた無回答をやめようねって、先生の取組だけで全然逆に変わる。先生がそこに意識を向けてやるだけで全然変わるということだと思っただけですね。

【市長】

いろんなことができている実績もありますからね。そういうふうに自信を持ってもらってこういうのを取り組んでもらうと。じっくり、じっくり力という新しい言葉もできて。確かに、それはなかなか弱い部分なので、逆にそこを、強目の言葉がおそらくこの地域の学力を高めていくことにもなると思いますし、あるいは、僕もどうやったら育つかわからないけど、ぜひ研究してもらいたいですね。

うちの子とかを見ていても、何か成功するとシールを張って、達成した、やってみたいなことがはっきり言っているの、何かじっくり力でないんですかね。できたらシールがもらえるからうれしいみたいな、何かすぐ反応するのが楽しみになっているので。むしろ、難しい本をたくさん、ずっと長く1冊本を読むとか、何かそういうのをいろいろ、どうやったらできるのか、取り組めるのかみたいなことは研究してもらいたいんです。

【教育長】

それと一緒にやるというんですかね、何人かの友達と長期間にわたって。

今、ちょうど夏休みで自由研究なんかやっていますけれども、あれも1人でやるんじゃないかと、何人かで取り組んだり。やっぱり教え合ったり学び合ったりするのも子どもたち自身がやってくると、大分先生も楽になるというのも変な話ですけど、ちょっと違って見えるのかなと思うんです。

【伊藤委員】

大変だね。自分がそうやってきたじゃないですか。ほんとうに次に何をアドバイスするかというので、ものすごい大変。

【市長】

かなりスキルが必要ですよ、おそらく。

【教育長】

それが、今、指導課長が言っていました、目当てと振り返りというものの、目当てというのが子どもにミッションを与えるような感じなんですよ。それが大分、どんな目当てをやるかというのが相当授業を左右するなということを、今ちょうど指導課長、考えているところなんですけれど。

【市長】

そこをぜひうまく反映してもらえれば。じっくり力で。

【教育長】

じっくり力、非常に参考になりました。

【市長】

米田委員。

【米田委員】

英語教育についてなんですけれども、何のために学ぶかというところが、まだ国としてもやや曖昧のように感じられます。私も大学の教員ですので、文科省の方にもお越しいただいてご講演してもらって、いろいろ授業の中の取り入れ方とか、今取り組んでいるところではあるんですけども、留学生と接する中で、ミャンマーですとかネパールですとか、そういった多民族国家が共通語として文法構造が簡単なので英語を取り入れていると。小さいころから英語を学校の中で学んでいる。だけど、日本語のようなややこしい言語が相当にできる子たちだけれども、TOEICとかを受けると、決して得点、高くはないんです。これだったら、日本の英語に苦手意識を持っている子たち、高校を出て、大学へ入った子たちとそんなに変わるわけじゃない。

彼らに聞くと、共通語としてはやっているけれども、やはり物を考えるときは自分の民族の言語でしか考えられないし、また、多民族国家をこれからどうするかというときに、日本語の構造とか、日本の考え方というのは非常にじっくりくると言ってくれるんです。

日本語というのは、主語を省略して、さらに動詞というか、述語が最後に来て、要するに自分がしゃべっている間に人の顔色を見ながら結論が変えられる言葉なので、私、最近、傾聴の文化、心理学で言うところのカウンセリングとか、傾聴の文化というふうに考えているんですけども、そういう意味では、これから世界の中で日本がどうあるかと、かなり大き過ぎるんですけども、考えたときに、日本語を大事に、まずは日本語で考えるくせというのは決して悪くはないと。

江戸時代以来、識字率が非常に高い奇跡的な国というか、文化だと言われているような中で、日本語になじみ過ぎたがために英語とか外国語に苦手意識があるとすれば、それは決してマイナスではなくて、教育が行き渡った結果なので、今は確かに迷うことがあるかもしれないけれども、英語を学ぶのはなぜなのか。

また、日本語になじんできて、それが世界からも認められる文化だとしたら、それを守りつつ、これからプラスして英語をやっていくんだったら何のためなのかというところが、個人のレベルでいいので、例えば自分が思っていることを相手に伝えるというのは大事なことだとか、あるいは相手の言うことを聞きながら自分の言うことを変えていくというのは悪いことじゃないけれども、じ

や、そこは日本語を大事にしつつ、公的な見解は英語できちんと言えるように。英語に直せないうちは、それは結論が出ていないということだから、それはよくないんじゃないかとか。何とかならないのかなというふうに思っているんです。

ですから、学校で先生方が、もし自分、英語で教えるなんてできない、どうしようと、子どもたち、でも塾へ行けないから、私、英語ができない、どうしようという、これで教育現場自体が、学校はおもしろくない、先生方も、ああ、授業が憂鬱だとなったら本末転倒であって、そこでぶれないようにしていただきたいとか、ぶれないような仕組みをつくっていただきたいと思うんです。

ですから、この前ALTの先生に来ていただいて、とても明るい、やはり日本人の先生にはない明るさを感じたんですけれども、どんどんもっと人を増やして、お任せして、日本のこれまでの、日本人のというのは、そういう言い方も私は好きじゃないんですけれども、従来どおりの教育で自信を持って先生がやっていただけるような、もっといい方向に改善するところへ向かっていけるような、自信をなくすような方向に英語がなくてほしくないと思います。

#### 【伊藤委員】

ぶれないということで、今、オリンピックをやっているの、話はずれますけど。

柔道はオリンピックの種目になりましたよね。それで、剣道はなっていないんですよ。最初の東京オリンピックのとき、剣道は世界で42カ国がやっていたんですよ。それで、日本はやりたいたったんだけど、それはいいなことだったんだけど、諸外国の剣道の団体に聞いたら、私たちが戦うために剣道をやっていない、日本の文化を知るために剣道をやっているんだということで、いまだに剣道はオリンピックの種目に手を挙げようと日本がしないと思うんです。

やっぱりそういうこと、英語を学ぶのに、やっぱり大事なところを押さえて学ぶということが私も非常に大事だなと、そういう大事にしているところは、大事にしていけないと思いません。

それから、もう一つ、じっくり学ぶという部分で、最近、ミュージック・スタディーといって、PVで歌を歌いながら歴史を全部勉強する。だから、非常に早い、端的に。そういうものが出ていくということを知っておいてもらおうと。漫画で、PVで、絵になって歌でという。

#### 【市長】

それで覚えちゃうということですね。

#### 【伊藤委員】

もうほんとうにすぐ覚えて、すごい記憶力になるという。

#### 【市長】

今でも、学校現場では、当然日本語は大事だということでもまずやっていますし、その中で、やはり我々が想像している以上のスピードでグローバル化が進んできているんだなということから、外国語教育というふうに今なってきていると思うんです。

まさか私もこんな、ジュニア・サミットを桑名でできるとは思っていませんでしたので、英語はそんなに得意ではありませんけれども、やはり英語でスピーチをしろと外務省からは言われる時代になっていますし、その中で、私以外はみんな英語が得意な高校生の前でスピーチをするという、この辱めを受けながらも何とか形にしなきゃいけないという時代にもなっていますので。

そういう意味では、日本語に誇りを持つのはすごく大事ですし、アジアの中での日本という立ち位置から考えると、おそらく日本語を取り巻く文化、そのあたりに対するリスペクトでもあると思いますので、そこは大切にしていってほしいなと思うんですが、おそらく今日いろいろ出

てきた人工知能とかそういうのをいろいろ考えたりしていく中で、子どもたちの生き残るというか、日本が人口減少していく中で、何でご飯を食べていくのかみたいなことを考えていくときに、おそらく1つのツールとして獲得するというような方向性になっていくのかなと思います。

今、ちなみに先生たちもあまり苦手意識を持たないということで、それこそ、今、DVDとかCDも使っていただいて授業もやってもらっていますので、先生たちがしゃべれないから恥ずかしいということがないように頑張ろうというようなことを思ってもらっているんですね、そういう意味でね。

それは、しゃべれないのはコンプレックスですから、そういう意味では。大変です。でも、しゃべらなくちゃいけないときがほんとうに来るのかなと。サミットのときはほんとうにみんな、市長、町長たちは大変苦慮しました。しゃべれる人がうらやましいなど。

ありがとうございます。

ほかに何か、最後これだけは言っておきたいということがございましたら。いかがでしょうか。ありがとうございます。

では、これで本日の事項は終わりました。

事務局から連絡事項など、何かありますか。

#### 【総務課長】

長時間にわたり、ご議論いただきましてありがとうございます。

本日いただきましたご意見を、今後策定を予定させていただいております教育振興ビジョンに生かしてまいりよう進めてまいりたいと思っております。

なお、今後のこの会議の日程につきましては、改めてまたご連絡をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

事務局からは以上でございます。

#### 【市長】

ありがとうございます。

これで本日の事項は全て終わりました。

これをもちまして平成28年度第1回桑名市総合教育会議を終了いたします。今日はどうもありがとうございました。

— 了 —